（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和４年度　海外派遣研究員研究報告書

令和７年７月31日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　経 済 学 部
資格・氏名　　教授　　安田　静

令和４年度海外派遣研究員（　中期　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　中期

２　研 究 課 題

欲望の眼差しからの解放：上演文化の芸術化と観客に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦　2023年３月27日～2024年１月28日

４　派　遣　先　　フランス，イタリア，ドイツ，オランダ，チェコ，スウェーデン，オーストリア

５　研 究 目 的

本研究ではバレエ，オペラなどハイアートの表現の場である一方，商品化された性の提供場所でもあった上演文化において，舞踊手・歌手達は観客の「欲望の眼差し」からいかにして解放され，「芸術」として立つに至ったのかについて実証的に検証する。また，そうした上演文化の変革は観客との関わりにおいてどのように進んだのか，観客論の見地からも考察を行う。

なお，本研究はパリ・オペラ座に関する調査を中心とするが，欧州近隣諸国の主要な劇場と比較・検討するため，フランス以外の国々の主要な歌劇場を実際に訪問し，フィールドワークを行って，各国の劇場文化における観客の観劇行動についても明らかにする。

以上が本研究の主たる目的である。

備考：当初の研究計画では米国も研究対象としていたが，下記の都合により10月末頃まで出張が困難であったため今回は対象から除外し，研究目的及び研究計画も一部変更することとなった。

（ 様式D－２ ）

６　研 究 概 要

当該海外派遣制度により，当初 9 ヶ月の予定でフランスの長期滞在ヴィザを申請し，主にパリに滞在して欧州での調査・研究に従事した。予算は令和 4 年度のものを執行したため，2023 年 3 月 27 日より日本を出発し，帰国は同年 12 月 21 日の予定であったが，受け入れ先大学 INSEEC の共同研究者 Stéphanie Havet 氏との打合せのためリヨンへ出張後，帰着時のパリ市内リヨン駅周辺で転倒・骨折，4/29-6/21 まで入院生活を送ることとなった。そのため，当初帰国予定から約 1 ヶ月の期間延長が認められ，ヴィザ有効期限の 1 月 28 日までパリに滞在した。なお，退院後も機能快復に向けて週３回のリハビリテーションが執刀医により指示された。そのため，リハビリ明けの 10 月下旬から，ようやく欧州内各種劇場への出張が可能になった。

出張先はオーストリア（ウィーン），イタリア（ミラノ），チェコ（プラハおよびブルノ），オランダ（ハーグおよびアムステルダム），スウェーデン（ヨーテボリ），ドイツ（ベルリンおよびハンブルク）で，当初予定していたアヴィニヨンやエジンバラの夏の演劇祭で見られるはずだった作品の一部は，仮設舞台ではなく常設の各劇場内で鑑賞し，各国の観客層やその観劇行動について，それぞれの国，それぞれの劇場の特色を実際に観察するフィールドワークが実施できた。

また，パリの国立図書館付属パリ・オペラ座図書館（Bibliothèque-musée de l'Opéra）で，まだデジタル化されていない 19 世紀末から 20 世紀初頭の貴重な現物史料の数々を直接閲覧して撮影し，日本に持ち帰ることができた。

なお，令和 5 年度(2023 年度)には研究代表者として，科研費共同研究プロジェクト（合計 9 名の研究者による）の研究課題「上演文化に関する『芸術化』の国際比較研究：商品及び労働者としての演者を巡る諸問題」（基盤研究 B）が採択されており，派遣期間中はパリ在住であったことから，本海外派遣研究員研究課題と関連の深い上記課題についても，日本からの出発では到底叶わないこれら多数のフィールドワークを短期間で実施することが可能となった。

７　研究結果・成果

入院に伴い研究計画には大幅な変更が必須となったものの次のような成果が得られた。

はじめに，欧州の様々な劇場のフィールドワークを通じて得られた成果のうち，主要な部分について記載する。

チェコ：一般的にはミュンヘンの劇場が「欧州で最初に電気照明を導入した」と言われているが，実際にはミュンヘンよりも東のブルノ市（チェコ）の Mahenovo 劇場ではミュンヘンに先立ち，エジソンの発明による電気照明が 1 年早く実現していた。劇場ロビーにはそうした「先駆的発明」に関する常設展示があり，大いに参考になった。また，当劇場では数週間前から全席完売になっていた若手振付家の公演の戻り券を手に入れることができ，*Radio&Juliet* を 2 公演鑑賞した。1 回目は通常価格の一般向

け公演，2 回目は中・高生のための貸し切り公演で，いずれの公演でもパリなどの大都市の歌劇場ではもう滅多に見かけなくなったロングドレスなどで華やかに装った観客が多く，「ハレの場」を楽しむ伝統を目の当たりにした。ただし，中高生の団体客の中には，相当数の「携帯依存」の生徒があり，上演中もあちこちで携帯が光っていたのは時代の流れとはいえ残念至極である。

オランダ：ハーグ市を拠点とする NDT（ネーデルランド・ダンス・シアター）の活動に注目し，当地を 3 度訪れて，日々のレッスンに加えて貴重な舞台稽古の様子を見学することができた。また，各作品で主たるパートを担当していた三人のダンサーおよびダンス・ミストレスに直接取材し，ダンサーのための社会保障制度や身体のメンテナンス，退団後のキャリアのための受け皿といった「労働条件」に関する内容，及び作品の創造過程や解釈，あるいは作品の伝承などについて聞き取り調査を実施し，貴重な談話を得た。これらの取材内容については，今後，紀要等で発表予定である。

ウィーンフィル＠ウィーン，ベルリンフィル＠ウィーン，パリ管弦楽団＠パリ：日本では専門分野の舞踊公演観劇で手一杯のところ，今回の派遣期間中は普段足を運びにくいオーケストラ公演を鑑賞する機会を得た。ウィーンでは，ウィーン楽友協会での年間予約客向け公演を皮切りに，同一プログラムでアジアツアーを行うウィーンフィルの初日を鑑賞，同プログラムで日本での複数公演も決まっていたため，大いに期待をして臨んだが，シューボックス型の本劇場では観客席がオーケストラ奏者よりも低い位置となり，とりわけ前方席では音響の点で理想的とは言えず，格安の後方立ち見席最前列の方が恐らく音質は良いと思われる。ラン・ランの超絶技巧によるサン・サーンスのピアノ協奏曲は，深みに乏しいアクロバットと感じられた観客が複数あったものの，ウィーンの礼儀正しい年間予約客たちは熱狂も酷評もしていない。一方，ベルリンフィルはミュンヘン歌劇場から移籍したペトレンコによる年末特別公演で，ホール自体は若干長めの残響が気になるものの，演奏の完成度はウィーンフィルを遙に上回っていた。これら 2 つのオケに比べ，日本での知名度はいささか劣るのがパリ管だが，評論がほぼ常に絶賛のフレーズで埋め尽くされる若手 K・マケラ指揮による演奏では，フレーズの細部に至るまで実に丁寧な仕事がしてあり，Yunchan Lim とのラフマニノフ・ピアノ協奏曲も，ショスタコーヴィチの２番も，圧倒的な「音楽の力」をまざまざと現前させるものであった。ウィーンやベルリンの礼儀正しい観客とは異なり，演奏に不満があれば遠慮なしの大声量で「ウー！」というブーイングを飛ばすパリの観客達が，この日は大賛辞を送っていたのも当然の出来映えであった。

イタリア：ミラノ・スカラ座では，主役級のベテラン歌手が何名も必要とされるために上演の機会が少ないオペラ『ドン・カルロ』と，当劇場に勤務するオペラファンの友人からの熱烈な勧めもあり，オペラ『ピーター・グライムズ』を鑑賞した。パリ同様，スカラ座では水準以下の演奏には容赦のないブーイングが飛び交うことが多く，これまでにも何度もそのような場面に遭遇している。これらの観劇行動は，ある程度までラテン系の国民性に共通するものと言えるだろう。幸い，現地オペラファンの高評価に従って鑑賞演目を決定したため，両演目とも素晴らしい完成度であり，とりわけ後者のオペラでタイトルロールを演じた B・ジョヴァノヴィッチは，R・カーセンの

演劇的効果の高い演出（村人達の「言葉」が凶器となって迫る現実を彼らが操る仕事用のナイフに重ねる，など）とも相まって，歌唱と演技とが実に巧みに織り合わされた素晴らしい舞台を実現していた。

このように，各国の劇場に実際に足を運ぶことで，音響効果や舞台機構，客席の配置やロビーの構造を踏まえながら，今や「芸術」として誰も疑うことのない「劇場文化」の現状について，かつてのあからさまな欲望の眼差しから解放された演者の姿や，観客の観劇行動を実地に観察することができた。

次に，主にパリ・オペラ座図書館で進めた研究の成果について報告する。

本研究課題「欲望の眼差しからの解放：上演文化の芸術化と観客について」の大枠には数年前から着手している。2018-2021 年度には科研費研究課題「舞踊の『芸術化』までの実証的検証：日仏伝統舞踊の性風俗からの分離」（研究代表者），また 2020-2022 年度には，日本大学経済学部内競争資金によるグローバル社会文化研究センタープロジェクトとして「欧州における歌劇場文化の担い手の変遷と芸術作品受容の変化について」といった研究課題に取り組んでいる。

このうち後者のグローバル研プロジェクト研究課題については，2024 年 1 月 18 日に本研究者を研究代表者として，共同研究を進めてきた東京大学経済学部特任助教の森脇優紀氏とともに，ワークショップ（口頭発表）を Zoom で行った。（本研究員は当時パリ滞在中のため遠隔で実施。）本発表では次の 2 つの側面から，歌劇場の担い手としての観客について検討した結果を報告した。

1．アボネ（定期予約客）に関するパリ・オペラ座のディレクター及び振付家による改革（劇場のマネージメント）

2．パリ・オペラ座に保存されているアボネのリスト及び支払いに関する各種の史料（帳簿，領収書等の手稿）

まず 1 について，研究代表者（安田）は「ジャック・ルーシェとセルジュ・リファールによるオペラ座の改革」についての発表を行い，両者が苦労を重ねながら具体的にどのような方策をもってバレエの「芸術化」を推進したのか，現物史料を大いに活用しながら明らかにした。本内容については，日本大学経済学部グローバル社会文化研究センターのワーキングペーパーで発表の予定である。

2 については，手稿資料解読・分析を担当する森脇氏との共同研究として，これまでバレエ正史では取り上げられる機会が少なかった女性観客に注目し，パリ・オペラ座定期予約客（=アボネ）の構成について，現在進行中の研究成果を発表した。なお，2 の研究成果については，前述の科研費共同研究プロジェクト「上演文化に関する『芸術化』の国際比較研究：商品及び労働者としての演者を巡る諸問題」の一環として，当研究プロジェクトメンバーに加えてフランスより研究者を 2 名招聘し，2025 年 10 月 25−26 日に日大経済学部で開催する国際シンポジウムで発表予定である。

以　　上